

せいかつ

きょうの一品

レンコンと高野豆腐の挟み揚げ

◇材料(2人分) レンコン100g、高野豆腐1個(17g)、しょうゆ、みりん各大さじ1、ショウガ1片(10g)、米粉大さじ2、揚げ油適量

◇作り方

①レンコンは厚さ5mmの半月切り、ショウガはすりおろし、高野豆腐は水で戻してからしっかり水気を絞り、厚さを半分にしてから2等分にする。



②しょうゆ、みりん、ショウガのしぼり汁を合わせ、高野豆腐にしみ込ませる。

③レンコン2枚で高野豆腐を一つずつ挟み、離れないようにつまようじで2カ所留める。

④ビニール袋に米粉を入れる。③を袋に入れ、まんべんなく米粉を付ける。

⑤180度に熱した揚げ油でほんのり色づくまで揚げ、粗熱が取れてからつまようじを外す。

◇メモ 高野豆腐に味が付いているのでそのままお召し上がりください。

=1人分216kcal、塩分1.4g (後藤のみ子) 2017.12.7

◇出来上がりのカラー写真は「どうしん電子版」で見ることができます。

子宮頸がんワクチンに米医学賞

米国最高権威の医学賞であるラスカー賞の今年受賞者に、子宮頸(けい)がんワクチンの開発に貢献した米国立がん研究所のダグラス・ローウィー所長代行ら2人が選ばれた。

ローウィー氏は子宮頸がんを引き起こすヒトパピローマウイルス(HPV)を研究し、その持続的な感染を防ぐワクチンの基本技術を確認した。

ウイルス感染から発がんまでは長い年月がかかる。賞を授与したラスカー財団は「がん削減効果が証明されるのはまだ先だが、ワクチンの利益は既に明らかだ」とした。

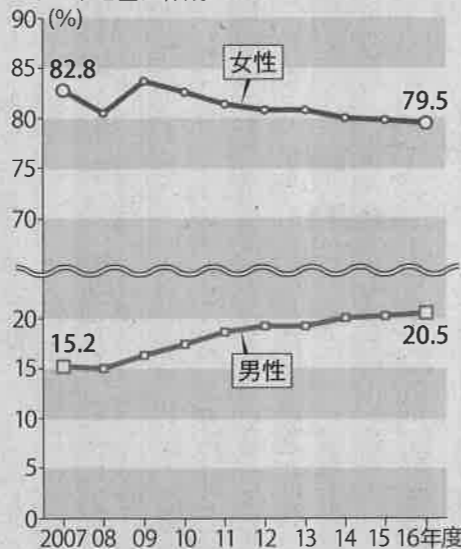
同賞はノーベル賞への登竜門とも言われ、人工多能性幹細胞(iPS細胞)の開発でノーベル賞を受けた山中伸弥京都大学教授も受賞している。

入居する高齢者に食事を配膳する男性介護職員
旭川市の軽費老人ホーム「サンハイム」



介護労働者の男女比

※介護労働実態調査(介護労働安定センター)のデータを基に作成



男性の特長を生かした仕事も期待される一方、男性厚生労働省によると、介護保険施設の入所者は、男

男女 役割分担で連携

「夜勤もあり、呼び出しがあればすぐに駆けつけないといけない。力仕事では女性介護職員から頼りにされました」

札幌市内の介護老人保健施設(老健)で介護職員として2010年から約6年間働き、現在は同市内のデイサービス施設に勤務する介護福祉士矢吹信人さん(27)はこう振り返る。

老健の職員は当時30人のうち女性26人、男性4人。利用者ベッドから車いすなどに移す介助や力仕事も多く「体重が比較的重いや、背が高い人など、小柄な女性が身体介助するのは大変」という。

「やはり入浴・排泄介助の時、女性利用者から拒否されたことがあるという矢吹さんは、利用者の希望には「周りの女性介護職に頼んで代わってもらおうなど臨機応変な対応が必要」と強調する。

介護職員が直面する課題がある。「同性介護」だ。一般的に、施設では女性利用者には女性介護職員、男性利用者には男性介護職員が介助するのが原則とされる。特に入浴・排泄介助などでは、女性利用者が男性職員の介助を敬遠するケースがある。男性利用者は女性職員への拒否反応は比較的小さいという。

力仕事で頼りに 「同性介護」に壁

一方で佐々木副施設長は、工夫することで同性介護の課題は克服できると指摘する。たとえば同施設では、女性利用者の入浴介助では、体を洗い、お風呂からあがって下着を着るまでの介助は女性職員が行い、着衣や、髪の毛を乾かしたり水分補給をしたりといった介助は男性職員が担う。このように介助を分担することで、入浴や排泄も

性22.6%、女性77.4%(2016年9月末時点)。介護施設入所者は平均寿命が長い女性の割合が高い。軽費老人ホーム「サンハイム」(旭川市)でも入居者55人中、女性は48人。職員は隣接するデイサービスと合わせて女性12人、男性4人だ。佐々木副施設長(44)は「一般論として、女性介護職員の方が、男女双方に対応しやすい点で配置がしやすい面がある」と話す。

女性が多い職場での人間関係で戸惑う男性介護職員もいる。札幌市内の介護療養型医療施設に勤める男性介護福祉士(29)は「仲の良い女性職員同士がグループをつくり、もめ事が起きることがある」と話す。

男性介護福祉士が受け持つフロアでは職員十数人のうち男性は2人。女性介護職のグループ間で仕事をめ

ぐり意見が合わないことなどがあり、男性介護福祉士は「『まあまあ』と間を取り持ち、なだめる役回り」。人数が少ない男性介護職員は現場で孤立しがちでもある。札幌市内の有料老人ホーム管理担当の森田勇一さん(43)は昨年、他の介護施設や病院関係者ら約10人と、介護・医療・福祉職として働く人たちが情報交換をしたり勉強会を開く連絡会を立ち上げた。男女の隔てなく参加を呼び掛けるが、森田さんは「職場で少数で、他の職員とつながりをもたないこともある男性介護職にとって(施設や業種を超えた)横の連携は大切」と強調する。

「介護の仕事は暗いイメージばかり。そこを変えたい。楽しんでる姿にフォークスを当ててほしい」という男性介護職の切実な訴えも印象的だった。

確かに新聞記事などでは介護施設関連の事件、事故の記事が目にする。イメージを変えるためにも、介護現場からの声を発信する必要性を感じた。ここでも、男女介護職員が手を携えるはずだ。

編集後記

20~40代の若い世代の男性介護職から話を聞き、女性の多い職場環境の中で男女双方が特長を生かし、工夫しながら介護の仕事をしていることを知った。

「介護の仕事は暗いイメージばかり。そこを変えたい。楽しんでる姿にフォークスを当ててほしい」という男性介護職の切実な訴えも印象的だった。

確かに新聞記事などでは介護施設関連の事件、事故の記事が目にする。イメージを変えるためにも、介護現場からの声を発信する必要性を感じた。ここでも、男女介護職員が手を携えるはずだ。

さくらい・のりこ 2003年入社。生活部で介護・福祉を担当。39歳。

毎月第1木曜日に、女性が直面する暮らしの話題を女性記者が報告します。今回は番外編で男性記者が担当しました。

この記事に関するご意見、ご感想を募集します。住所、氏名、年齢を書いて、北海道新聞生活部(連絡先は、右ページの上)にお寄せください。

